

上野大友館（上原館）跡

— 下水道工事に伴う発掘調査報告書(2) —

2002年3月

大分市教育委員会

はじめに

本書、平成12年度に大分市教育委員会が実施した上野大友館（上原館）跡の公共下水道に伴う発掘調査報告書です。

大友氏は、鎌倉時代に豊後国の守護をつとめ、戦国時代の終まで、およそ320年間にわたって九州北部に大きな勢力を築きました。

その大友氏の政治、経済、文化の中心地は「府内」と呼ばれ、第21代宗麟（義鎮）のときに最盛期を向かえました。

西洋と南蛮文化の香りをたたえる国際貿易都市「府内」としての中世都市遺跡であることが、ここ数年の調査でこれらのことわざを裏付けられた成果がえられています。

今回の調査は、この大友氏館の南側、上野丘陵上に築かれているもう一つの館、上野大友館（上原館）跡の調査です。

上野大友館（上原館）跡は、西側に榾形の虎口をもち土塁を巡らす方形館であることは周知のとおりであります。まだまだ館跡の全容を把握するまでには、いたっていません。

しかし、平成4年度、平成11年度と平成12年度の5回の調査で館内部の様相を解明するための一点の光りを当てることができました。

本書の刊行にあたり、ご配慮、ご協力いただきました大分市下水道部下水道建設第1課及び各関係者の埋蔵文化財に対するご理解いただき、衷心より謝意の表す次第であります。

また、本書が広く文化財の保護と考古学、歴史学をはじめとする学術研究やさらに教育文化の向上に役立つことを願うものであります。

平成14年3月31日

大分市教育委員会

教育長 御沓義則

例　　言

1. 当報告書は、平成12年度公共下水道中央処理区上野丘西2637号線汚水雨水施設工事に伴う、埋蔵文化財調査の報告書である。
2. 発掘調査は、大分市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査における遺構実測、写真撮影等は、讃岐和夫・後藤典幸が行った。
4. 遺物の実測は、讃岐が行い、遺物のトレースは首藤直美（大分市教育委員会臨時職員）に協力を得た。
5. 遺構図のトレースは、讃岐が行った。
6. 本書の執筆と編集は、讃岐・後藤が行った。

目　　次

I.	調査の経過	1
II.	調査組織	1
III.	遺跡の立地と環境	2
IV.	遺跡の概要	5
1.	第1調査区	5
2.	第2調査区	8
V.	出土遺物	10
VI.	まとめ	15

I. 調査の経過

平成11年度に引き続き、周知遺跡である上野大友館跡（上原館）内の北側、上野丘西において汚水雨水施設工事区が計画されているため、下水道建設第1課中央建設係と協議をかさね、調査を平成12年11月27日～12月12日（実働11日間）に実施した。

その結果、特に館の北側に付随する、土壙基礎の構築状況とその直下に古代の溝状遺構等が確認され、注目されるものとなった。

II. 調査組織

調査主体 大分市教育委員会

調査責任者 清瀬 和弘（教育長）

事務局 大分市教育委員会

秦 政博（文化財課 課長兼事務局参事）

帶刀 修一（文化財課 課長補佐）

玉永 光洋（文化財課 主幹）

下水道部

工藤 哲雄（下水道建設第1課課長補佐兼中央建設係長）

波津久真澄（下水道建設第1課庶務係主任）

板井 和昭（下水道建設第1課中央建設係技師）

調査員 讃岐 和夫（文化財課 係長）

後藤 典幸（文化財課 指導主事）

発掘作業員 森田 秀夫・徳丸ヒデ子・牧野 君子

柴田アイ子・後藤 春美

（平成12年度）

III. 遺跡の立地と環境

上野遺跡群内にある、上野大友館跡（上原館）は大分市上野丘西に所在しており、当館跡は大分川左岸の東西に延びる丘陵上の中中央北寄り、標高約29m程の場所に位置している。

この地区には、御屋敷の字名が残っており、現状では土壘と空堀跡が遺存しているだけである。

これにより推定される館跡の規模は、土壘基底部間での南北長約156m、東西長112～130mの方形館である。また、大分市史編集の時に大友館跡の地形測量図が作成されており、それにより方形館の北西部には張り出し部が存在することが判明された。この張り出し部と本体には2mの比高差があり、その構造状況から「桟形」の虎口の形状を備えていることが判ってきた。

この館跡が位置する、上野丘陵上には数多くの遺跡が所在していることは周知のとおりである。古くは弥生時代からみられる。特に、現在の美術館が位置する場所では、弥生時代中期のV字溝が掘られた集落跡と後期前葉に比定される隅丸方形周溝遺構（10m×7m）で2間×2間の掘立柱建物跡が施された祭祀遺構は県下で初例の発見であった。

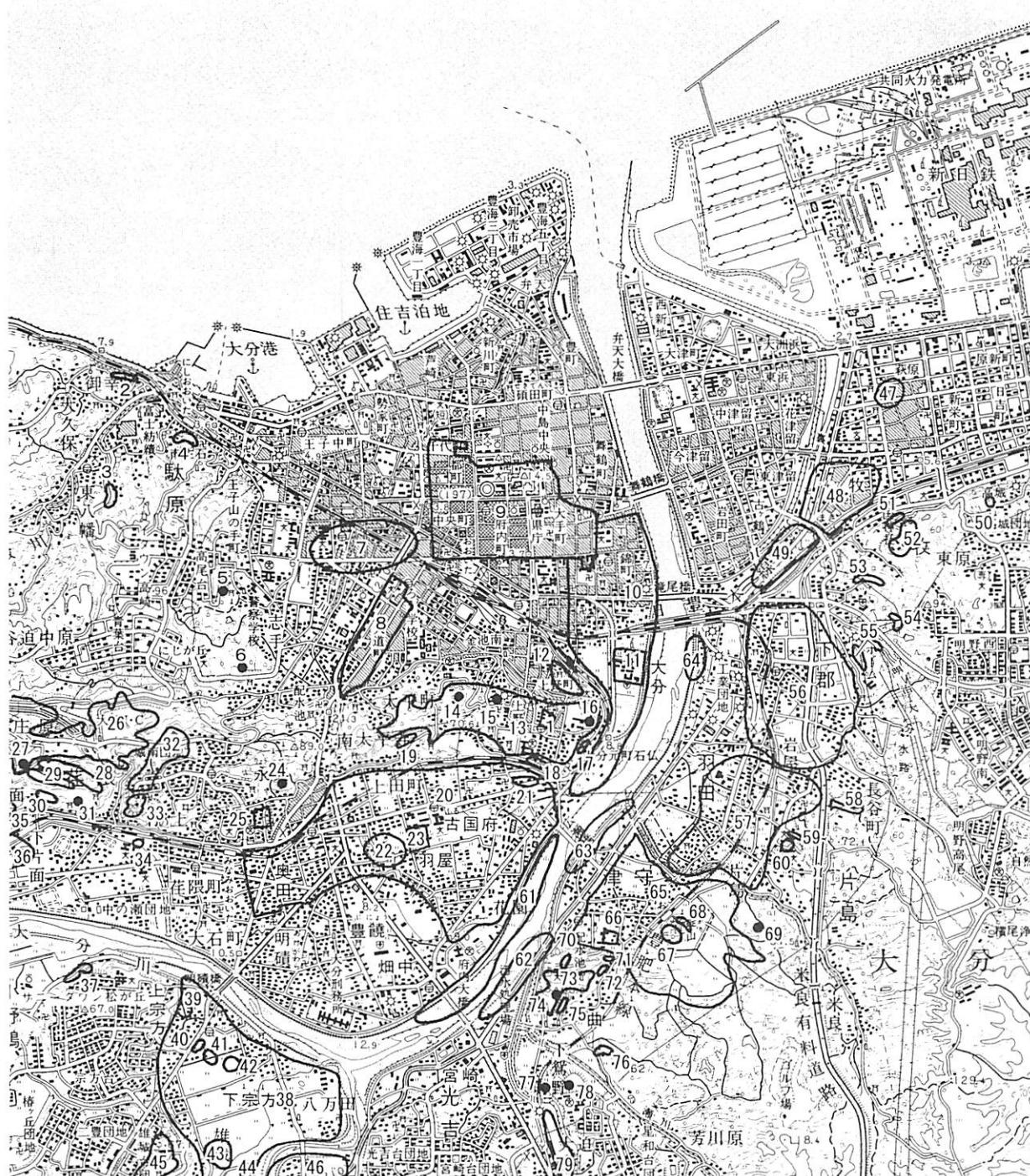
次の古墳時代では、共同墓地側の丘陵上に円墳である飯盛塚古墳が民家の裏手に1基所在をしている。これ以外にもマウンドを持つ古墳は、県立美術短期大学グランドの東側端部に古式の様相をもつ大臣塚古墳（前方後円墳）がある。すでに前方部を失ってはいるが、全長50m程度の規模と思われる。現状で残存している後円部径は約35mを測る。主体部は組合式の箱式石棺で棺内から人骨、短甲、刀等が出土したことが伝えられている。また、百合若大臣の伝説にまつわる古墳もある。

この古墳の南側には竜王畠遺跡（平成9年度調査・県文化課）があり、奈良時代から平安時代にかけての遺構、遺物を確認している。特に、南北方向の掘立柱建物群が約20棟以上と9世紀頃には築地塀で囲まれた施設が確認されており、特記する遺物としては鬼瓦の破片、赤色顔料のついた瓦片、円面鏡片などが出土している。この地域は高国府の地名が残っており、豊後国府との関連づけられる遺跡として注目されている。

また、上原館西側の上野1丁目付近では、古くから百濟系単弁の軒丸瓦など多くの遺物を採集されていましたが、平成10年度に民間開発に伴う発掘調査を実施しており、その結果、版築状に積み上げられた基壇遺構とその基壇上に四面庇の大型礎石建物跡を確認した。遺物については瓦類や土師器類が多量に出土しており、特に豊後国分寺創建時の軒平瓦とその近隣で軒丸瓦が出土している。このことから古代寺院である上野廃寺跡の存在が明らかになってきた。

また、平安時代から鎌倉時代にかけての磨崖仏が上野丘陵南東壁面部に所在している。特に大分元町石仏（国指定）を中心に岩屋寺石仏（県指定）などが連なる様に彫られており、この時代の文化が華やいだ時期であることがいえる。

この岩屋寺石仏の北側丘陵上には、文献でみられる「高坂横道」に比定される場所がみられ、9世紀中頃と12世紀中頃以降の2時期の遺構が存在する上野・岩屋寺遺跡（平成6年度調査・大分市）が所在している。



1 上野大友館跡	2 蟹喰横穴墓群	3 穴蟹喰横穴墓群	4 生石横穴墓群	5 亀甲山古墳
6 古宮古墳	7 東田室遺跡	8 大道条里跡	9 府内城・城下町跡	10 中世大友城下町跡
11 将山万寿寺跡	12 若宮八幡宮遺跡	13 上野遺跡群	14 飯盛塚古墳	15 上野廃寺
16 大臣塚古墳	17 竜王烟遺跡	18 岩屋寺横穴墓群	19 南太平寺横穴墓群	20 古国府遺跡群
21 岩屋寺遺跡	22 羽屋園遺跡	23 金剛宝戒寺跡	24 弘法穴古墳	25 永興遺跡
26 庄ノ原遺跡	27 蓬萊山古墳	28 田崎遺跡	29 田崎古墳群	30 万寿山古墳群
31 深河内古墳	32 城南遺跡	33 尼ヶ城遺跡	34 荏隈杉下遺跡	35 丑殿古墳
36 上片面遺跡	37 小野鶴横穴墓群	38 玉沢地区条里跡	39 北の後遺跡	40 六反田遺跡
41 山伏田遺跡	42 二反田遺跡	43 深町遺跡	44 植田平石遺跡	45 雄城台遺跡
46 下田尻地区条里跡	47 松平忠直萩原館推定地	48 牧遺跡	49 牧六分遺跡	50 高城觀音院備蓄錢出土地
51 松栄山横穴墓群	52 高城石棺群	53 下郡横穴墓群	54 北下郡横穴墓群	55 穴井前横穴墓群
56 下郡遺跡群	57 羽田遺跡	58 長谷横穴墓群	59 滝尾百穴横穴古墳群	60 岩屋遺跡
61 大分川河川敷1遺跡	62 大分川河川敷2遺跡	63 大分川河川敷3遺跡	64 大分川河川敷4遺跡	65 津守遺跡
66 松平忠直津守館跡	67 碇山山頂遺跡	68 碇山横穴墓群	69 津守古墳	70 滝尾守岡横穴墓群
71 鳥越伽藍石仏	72 曲迫横穴墓群	73 守岡遺跡	74 守岡古墳	75 曲平横穴墓群
76 一の迫横穴墓群	77 曲遺跡	78 芳川原古墳	79 鶴野遺跡	

第1図 周辺主要遺跡分布図(1/50,000)

次に、中世末期に描かれたと考えられる戦国時代府内絵図に現在の頤徳町を中心として中世の町並と大友氏館が堂々と描かれている。この大友氏館跡を初めて、平成10年度、駅周辺総合整備に伴う調査として、大友氏館跡の一角である南東隅を調査した。その結果、大規模な庭園跡と思われる庭石（景石）が発見された。遺物については、茶壺・天目茶碗や茶臼などの茶道具類と多くの輸入陶磁器片、京都系土師器皿・在地系土師器皿が多量に出土して注目された。

その後も館内での調査は、平成11年度・12年度・13年度にかけて調査を実施しており、北側の区画の一部などが確認され、新たな発見と成果が得られている。また、部分的ではあるが国指定史跡として平成13年度に部分指定をしているところである。

また、館を中心として中世都市である町並が整然と区画されていたことが、最近の調査で判明してきているところである。町屋の中を貫く幅約10mの道路や町の様子が判る遺構等や多種多彩な遺物が出土している。特に中国や東南アジア産の壺などが多く確認されており、これらの遺構、遺物からも往時の繁栄を窺い知ることが出来る。

以上の様に、上野丘陵部とその周辺の沖積部分には古代から中世にかけて政治、経済、文化の中心地であったことを窺い知ることが出来よう。

【参考文献】

- 「大分市史」上・中巻 1987 大分市
- 讃岐和夫「上野遺跡群」『大分市埋蔵文化財調査年報3』1992 大分市教育委員会
- 池邊千太郎「上野大友館跡」『大分市埋蔵文化財調査年報4』1993 大分市教育委員会
- 塩地潤一「上野岩屋寺遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報6』1995 大分市教育委員会
- 杉崎重臣「中世大友城下町第1・2次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報8』1997 大分市教育委員会
- 「大友館跡」『発掘調査概報I』2000 大分市教育委員会
- 「大友館跡」『発掘調査概報II』2001 大分市教育委員会
- 高橋信武「44大分県大分市上野遺跡群竜王畑遺跡」『日本考古学年報』50 1999 日本考古学協会
- 讃岐和夫「大分市上野廃寺について」『大分県考古学会第15回大会発表資料』1999 大分県考古学会

IV. 遺跡の概要

今回の調査は、館内の南北中央道路北側調査区と東西里道東側調査区の2ヶ所である。北側調査区を第1調査区とした。第1調査区は幅95cm・長さ46mで面積43.70m²を測る調査区である。東側調査区は第2調査区として、幅85cm・長さ20mで面積17m²を測る調査区である。両方ともに狭くて細長い発掘調査区である。

1. 第1調査区

道路の直下は、既に水道管やガス管等の埋設掘削溝のため、大きく改変されており、遺構の遺存状況が良好ではなかったが、柱穴群と北側隅に土壘の基礎と思われる内郭部の遺構を確認できた。

土壘遺構は、既に上部構造は削平されており、コンクリート舗装道路面から約30cm～40cm直下で土壘遺構の基礎を確認する。

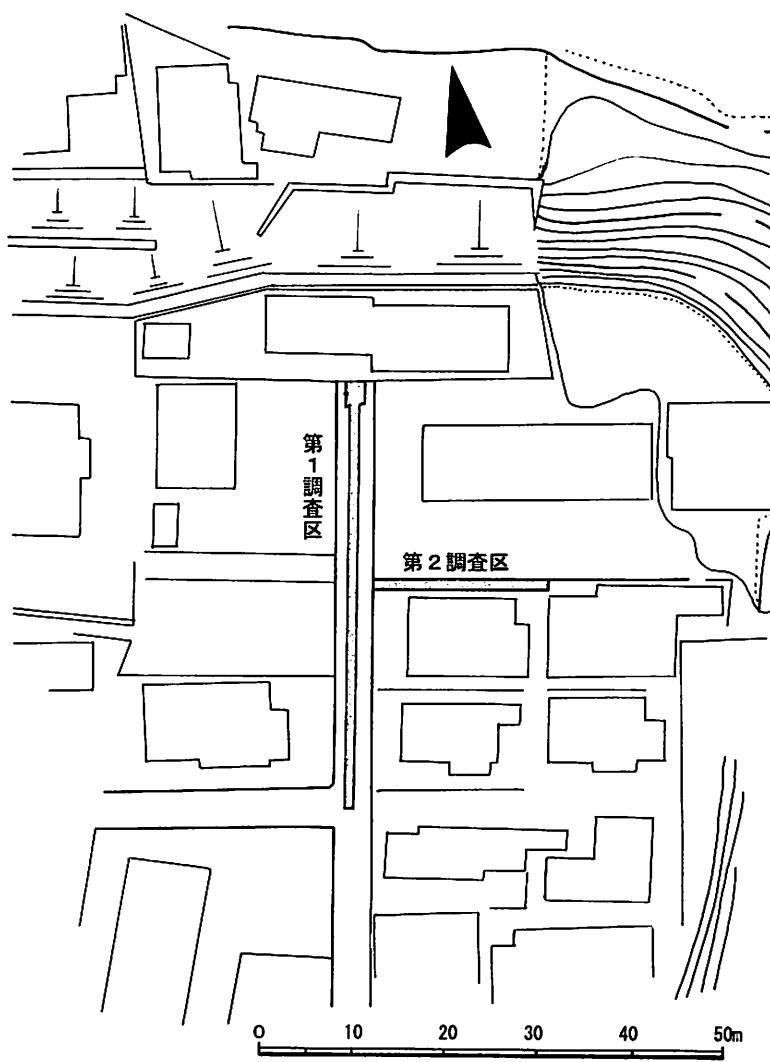
内郭部の土壘基礎は、台地の北端部から約18mほど南側の位置で40cm前後の自然礫を使用した。石垣状に前面を整え野面積みに積み上げたものである。基底部は標高27.85mを測る。土壘内部の土層堆積状況は多量の自然礫を混

入した。明暗と濃淡をもち黄褐色系と黒褐色系の硬質と軟質の粘質土を交互に10層ほど版築状に積み上げられており、この基底面は標高27.60mを測る。基底面はほぼ平坦面に施されている。

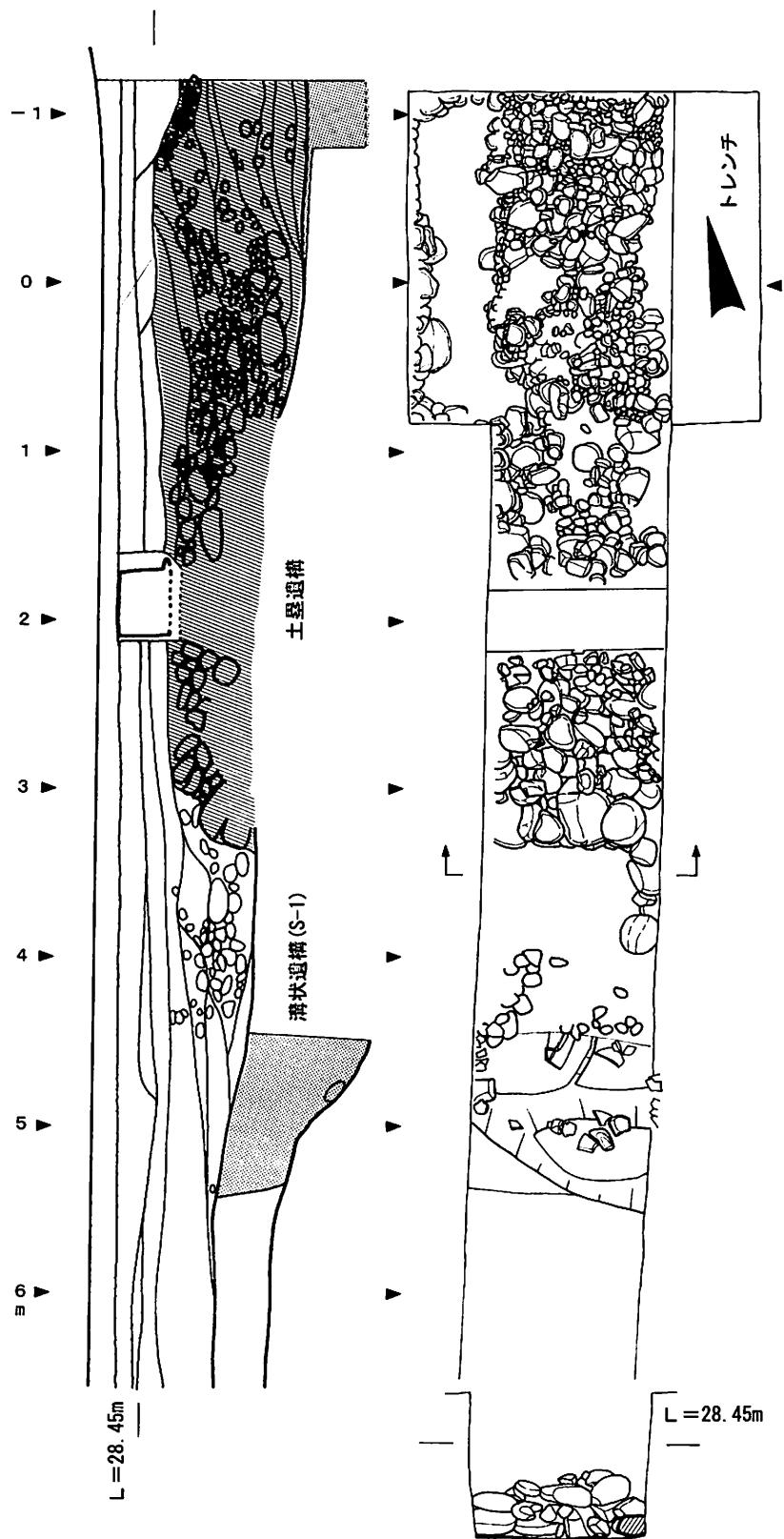
平成11年度の調査から南北土壘遺構の土層観察をみると、溝状に掘込まれた部分に斜め方向の積み土を行っており、状況からみれば、今回との土壘築造方法とは異なる様相を示している。

遺物については、小破片のため時期の確定等が出来なかつたが、辛うじて青磁片が1点出土しており、この遺物からみて15世紀から16世紀にかけての時期に比定できるであろう。

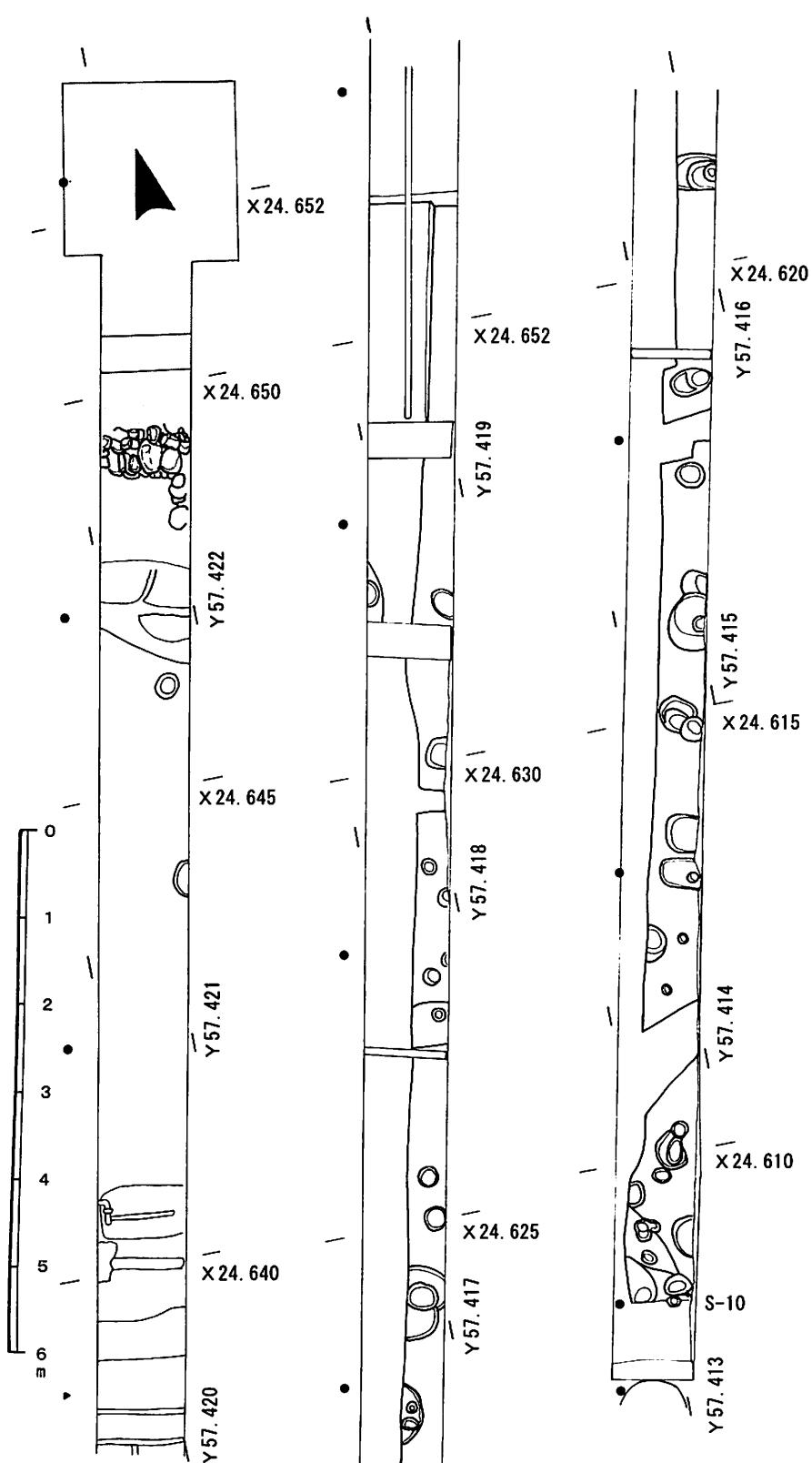
また、土壘遺構の直下には、



第2図 第1・2調査区配置図



第3図 第1調査区 土塁状遺構・溝状遺構平面・断面図(1/40)



第4図 第1調査区遺構平面図(1/80)

ほぼ同じ位置で古代の溝状遺構が発見された。溝は南側の位置で、東西方向に向けた掘り方ラインを確認したので、遺構の一部掘り下げを実施した。

溝状遺構の掘り方については、北側に向かって傾斜しており、溝の床面までは確認出来なかったが、このことから北側を区画する大形の溝状遺構であることが考えられる。土層の状況については黒褐色土層のみ堆積していた。狭い調査区の中から土師器の壺・高台付の壺、須恵器の大型甕片、緑釉陶器片（京都系）等、多彩な遺物が出土した。

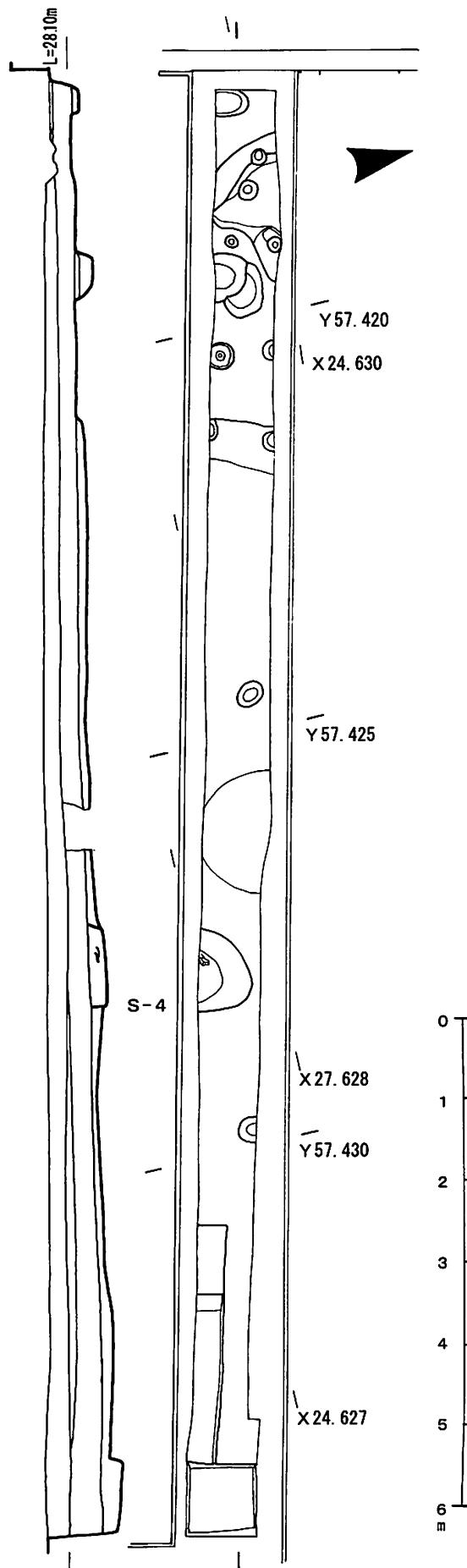
この遺物からみて時期については、9世紀後半から10世紀に比定されるものであろう。また、その他の遺構としたは細長い調査区の西側部分に

は水道管埋設溝のため搅乱を受けており、東側部分のみに大小40穴ほどの柱穴群がみられた。この柱穴群については掘立柱建物跡の存在することが窺えるが建物跡としての規模は不明である。また、時期設定についても柱穴内（S-10）より古代の土師器等が1点出土しているのみで全体的には不明である。

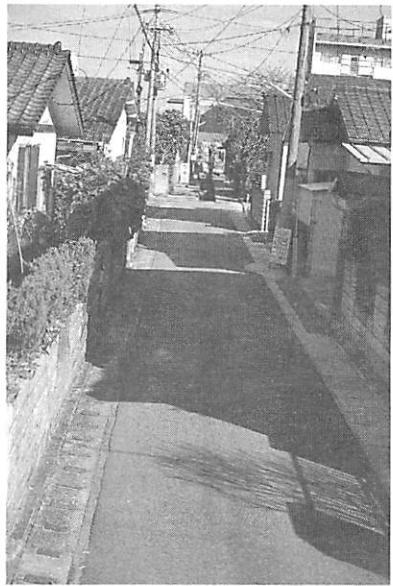
2. 第2調査区

調査区は、大きく搅乱を受けることなく遺構の遺存状況は良好であった。また調査区東側が約40cmほど床面が低くなっている、自然地形が傾斜していることが判明した。土層断面状況をみると灰茶褐色耕作土が10cm～30cmほど堆積しており、その下には暗黄茶褐色土が25cm～40cmほど堆積していた。

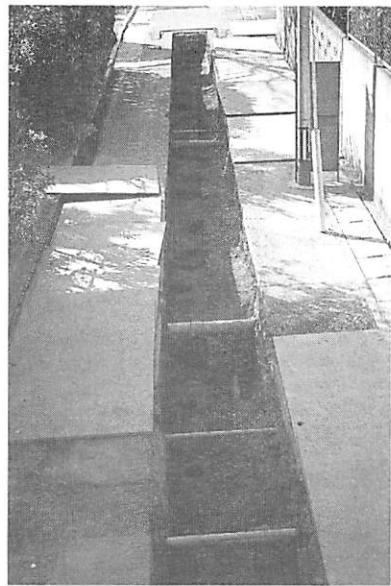
遺構については、調査区の西側に集中して柱穴群が存在しており、掘立柱建物跡と考えられるものであるが規模は不明である。また、調査区の中央部付近で平面形状が楕円形を呈する土坑（S-4）が北半分確認された。土坑の全容は不明であるが短軸（東西）の幅は1mと深さは20cmを測る規模であった。土坑埋土の暗灰褐色粘質土からは、第1調査区の溝状遺構内より出土した遺物と同様な土師器の壊が1点出土している。また、柱穴跡（S-2）よりからも土師器の壊蓋が出土している。



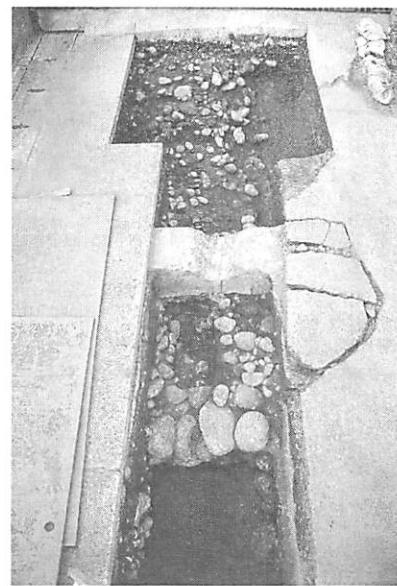
第5図 第2調査区遺構平面・断面図(1/80)



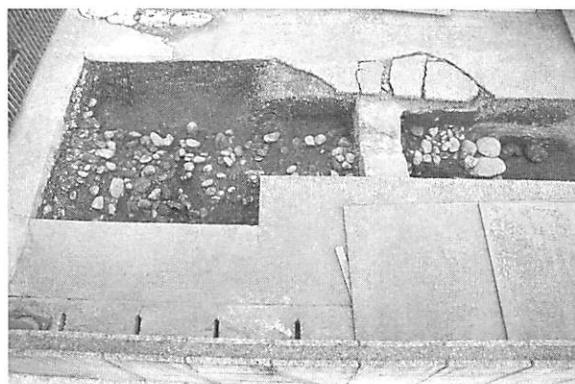
調査区を望む（南土墨より）



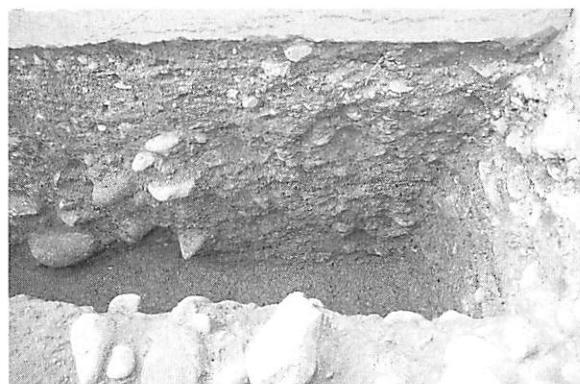
第1調査区（北より）



北土墨跡（南より）



北土墨跡（西より）



北土墨跡断面状況（東より）



S-1 堀り下げ状況（南より）



第2調査区（西より）



S-4 遺物出土状況（西より）

V. 出土遺物

遺物については、第1調査区では古代の溝状遺構（S-1）、柱穴（S-10）、中世土壙遺構より出土している。第2調査区では柱穴（S-2）と土坑（S-4）より出土している。全体的に遺物の出土状況は少量である。

第1調査区

(1) 溝状遺構（S-1）

①は土師器の坏である。復元口径13cm、器高4.7cmを測る。器形については、底部は丸味を有しており、底部と体部の接合部分には稜線が明瞭にみられる。体部は若干内湾気味に立ち上がり、口縁先端部で緩やかに外反する。口縁先端は丸味を有している。器面調整は内外共にヨコナデ、口縁内側には水引き痕がみられる、底部はヘラ切りである。色調は褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土は3mm程度の石英粒子、角閃石微粒子など微砂粒子が多く混入している。（P-20）

②は土師器の坏である。復元口径13.5cm、器高4.2cmを測る。器形については、底部は若干丸味を有しており、体部は若干内湾気味に立ち上がり、口縁先端部で緩やかに外反する。口縁先端部は丸味を有している。器面調整はヨコナデ、底部はヘラ切り後ナデ仕上げである。色調は内外面共に赤褐色で底部の外面のみ黄色を呈している。焼成は良好である。胎土は白色粒子、角閃石、石英微粒子混入している。（P-10）

③は土師器の坏である。復元口径13.3cm、器高3.7cmを測る。器形については、平坦気味の底部から体部は直線的に外反しながら口縁部へ立ち上がるもので、口縁先端部は丸味を有している。器壁は非常に薄く仕上げられている。器面調整はヨコナデ、底部はヘラ切り後ナデ仕上げである。色調は内外面共に赤褐色で底部の外面一部は黄褐色を呈している。焼成は良好である。胎土は白色、赤色粒子、角閃石微粒子が混入している。

④は土師器の坏である。復元口径13cm、器高3.5cmを測る。器形については、底部は若干丸味を有し、体部はやや直線的に立ち上がり、口縁部付近で若干外反する。口縁端部は丸味を有している。器面調整はヨコナデ、底部ヘラ切り後ナデ仕上げである。色調は外面暗茶色、内面は暗褐色を呈しておりカーボンが付着している。焼成は良好で硬く仕上がっており。胎土は白色粒子、石英、角閃石微粒子が混入している。（P-7）

⑤は土師器の坏である。復元口径13cm、器高4cmを測る。器形については、底部は平坦気味である。体部は直線的に外反しながら口縁部へと立ち上がっている。口縁先端部は丸味を有している。器壁は薄く仕上げられている。器面調整はヨコナデによる仕上げである。底部はヘラ切り後ナデによる仕上げである。色調は内外面共に赤褐色で底部のみ黄色を呈している。焼成は良好である。胎土は白色粒子、角閃石粒子、石英粒子と1mm～2mm程度の石英が混入している。（P-14）

⑥は土師器の坏である。口縁部を欠損しており、口縁部径は不明であるが底部径は7.6cmを測る。器形については底部は若干丸味を有し、体部は内湾気味に外反しながら立ち上がる。底部と体部の接合部分には稜線が明確にみられる。器面調整はヨコナデ、底部ヘラ切り後ナデ仕上げである。器壁は薄く仕上げられている。色調は暗褐色を呈している。焼成は良好である。胎土は白色粒子、石英、角閃

石微粒子混入している。(P-9)

⑦は土師器高台付の坏である。復元口縁径14.8cm、器高5.8cmを測り、底部には高台が付くもので、高台径7.6cm、高さ0.8cmを測る。器形については体部を直線的に外反し口縁部へ立ち上がる。口縁端部は丸味を有し、底部には逆台形を成している張り付け高台である。器面調整はヨコナデである。色調は暗褐色を呈しており、口縁端部の内側には2cm幅ほどの黒斑点がある。焼成は良好である。胎土は白色、赤色粒子と角閃石粒子、2mm程度の石英粒子が混入している。(P-5)

⑧は土師器高台付の坏である。口縁部が欠損しているため、口縁部径の大きさは不明である。高台径8.4cm、高さ1cmを測る。張り付け高台で逆台形を呈している。体部は若干丸味を有している。器面調整は外面はヨコナデ、内面は研き仕上げである。底部のロクロ回転方向をみると左回転痕を残している。色調については外面は黄褐色、内面は暗黄色と黒黄褐色でカーボンが付着している。焼成は良好である。胎土は白色粒子、石英粒子、2~5mm程度の砂粒子が混入している。

⑨は張り付け高台部分のみの坏である。高台径は7.7cm、高さ0.8cm測る、逆三角形を呈している。器面調整はヨコナデ、底部の一部を研きによる仕上である。色調は赤褐色を呈している。底部は黒色でカーボンが付着している。胎土は微砂粒子が多く混入している。(P-6)

⑩は土師器の瓶である。口縁部は小破片のみである。復元口径は27.4cmを測る。器形については、口縁部が直線的に立ち上がるるものである。器面調整はヨコナデ仕上げである。色調は黄褐色を呈している。焼成は良好である。胎土は白色、赤色粒子と角閃石粒子が混入している。

⑪は土師器の大形盤脚部である。接合部分の小破片であるため全体器形は不明である。脚部には円形と思われる透かしが施されている。器面調整は工具によるヨコナデ仕上げである。色調は外面淡赤褐色、内面は赤褐色を呈している。胎土は白色、赤色粒子と角閃石粒子が混入している。

⑫は土師器の甕である。復元口径18cmを測る。器形については如意状に短く外反する口縁部で、先端部が丸味を有している。器面調整はヨコナデ仕上げである。色調は淡赤褐色を呈している。焼成良好である。胎土は赤色粒子、角閃石粒子が混入している。

⑬は須恵器の甕である。復元口径37.4cm、頸部径31cmを測る。器形は甕の肩部は張り気味で、口縁部は直線的に外反している。口縁端部は内側に直角に折曲がる特異な形状を示しており、弥生時代中期の鋤先口縁部に類似している。器面調整については、口縁部外面に平行タタキ後ヨコナデ、内面はヨコナデを施している。体部では外面に平行タタキと内面には同心円タタキが施されている。色調については、淡黄褐色で一部淡黄灰色を呈している。焼成は良好である。胎土は微砂粒子が混入している。(P-13)

⑭は口縁部のみの緑釉陶器碗である。復元口縁部径13.4cmを測る。器形は内湾気味に外傾して立ち上がり、口縁端部で小さく外反している。口縁端部には押圧による輪花文を施している。胎土は硬質で灰色の須恵質に釉調が濃緑色の釉を施している。(P-1)

⑮は口縁部を欠損している輪高台付緑釉陶器の碗である。復元高台径は8cm、高さ1cmを測る。胎土と釉調は⑭と同様である。器壁は薄く仕上げている。器形の内面には体部と口縁部に接合する部分に段を有しており、明確に稜線が認められる。(P-1)

この⑭と⑮の生産地については、胎土と釉調でほぼ京都系の緑釉陶器であることが確実であろう。

⑯は土製品の手づくり柄杓である。欠損部が多いため復元は不可能であるが、柄杓の深さは3cmほ

どである。色調は暗褐色を呈しており、内面にはカーボンが付着している。焼成は良好である。胎土は白色粒子、角閃石粒子が混入している。(P-20)

(2) 柱穴内出土 (S-10)

⑦は土師器壺の蓋である。復元口縁部径15.6cm、器高3cmを測る。器形については、天井部は若干平坦面を形成しており、体部から口縁部にかけて丸味を有している。口縁端部の外面は直線的に面取りを行っており、先端部は尖りぎに終っている。器面調整は外面ヨコナデ、内面はヨコナデ後、研きを施している。色調は外面が淡赤褐色、内面は淡黄褐色と暗黄褐色を呈している。焼成は良好である。胎土は微砂粒子を多く混入している。

(3) 大友館土塁内出土

⑧は底部付近の青磁小破片である。大友館（上原）の土塁石積遺構内裏ごめ土層より出土した唯一の遺物である。

第2調査区

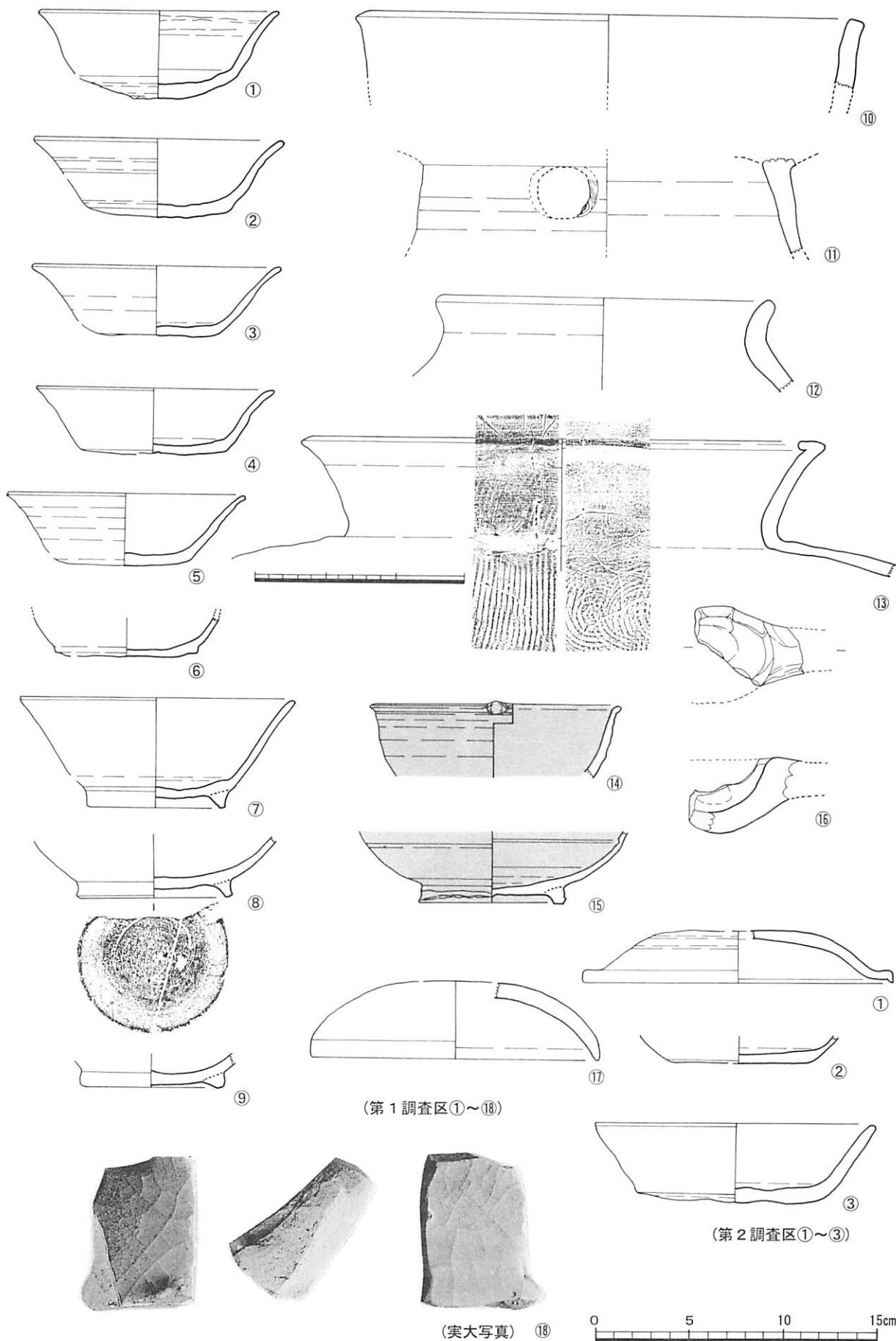
(1) 柱穴内出土 (S-2)

①は土師器壺の蓋である。復元口縁部径16.6cm、器高2.8cmを測る。器形については、天井部を若干平坦面にしており、体部は緩やかに内湾気味に曲がり、口縁部付近で水平に屈折して、口縁端部が角成型をしている。器面調整は天井部ヘラ切り後ナデ、体部と口縁部は内外面共ヨコナデ後、研きを施している。色調は淡黄色を呈している。焼成は良好である。胎土は微粒子の混入である。

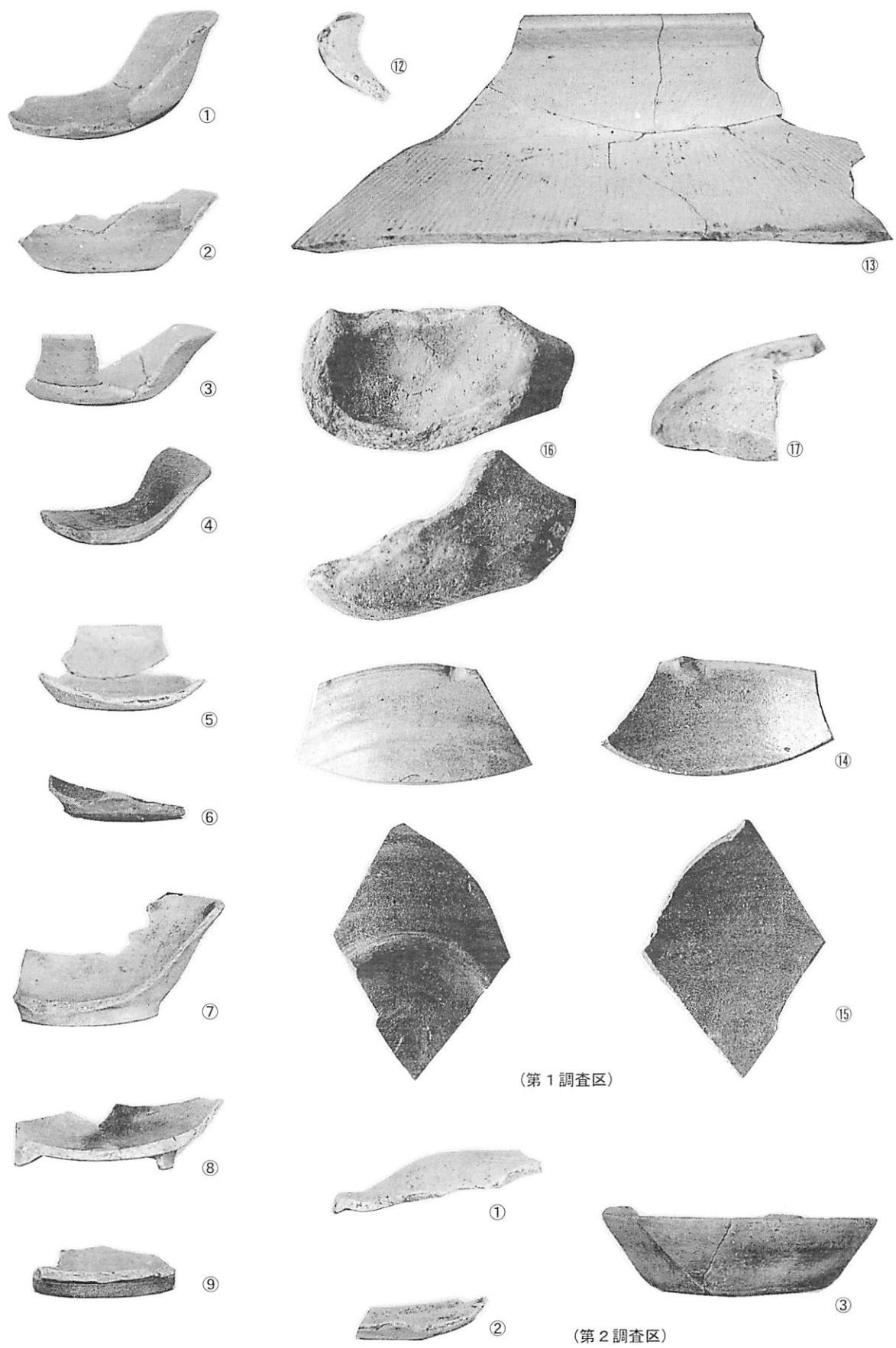
②は土師器壺の底部のみである。器形については、底部は若干平坦面を有しており、体部は外反する。器壁は薄く仕上げられている。器面調整はヨコナデ仕上げ、底部はヘラ切りである。色調は内面で黄色、外面では淡赤褐色を呈しており、内面にはカーボンが付着している。焼成は良好である。胎土は白色粒子と微砂粒子が混入している。

(2) 土坑出土 (S-4)

③は土師器の壺である。口縁部が若干楕円形を呈しており、壺の大きさは、口径では長軸で20cm、短軸は19cmを測り、器高は4.2cmを測る。器形については、底部は若干丸味を有し、体部は直線的に外反して口縁部へと立ち上がっている。体部と底部境の稜線が明瞭にみられる。色調は内面は黒褐色でカーボンが付着している。外面は暗褐色と褐色を呈している。焼成は硬く良好である。胎土は角閃石粒子、雲母微粒子や微砂粒子が混入している。



第6図 第1・2調査区出土遺物実測図



第1・第2調査区出土遺物写真

VI. まとめ

上野大友館（上原館）跡における確認調査は、平成4年度の大友館跡土壘整備に伴う発掘調査が館内の初例の調査であった。調査は南東隅の土壘断面の様子を確認した。現状の土壘幅は17m、高さは築造面から約2.5mを有している。土壘の築造状況は、10~20cm毎に版築が丁寧に行われている。30~50cm前後の自然礫が密に混入されたり、また小礫を含む層が見られている。版築は基底部の黒色軟質土層が整形されており、その面を境にして土壘の版築が見られた。平成11年度11月（2次）と平成12年度4月（3次）に西側土壘の一部分を個人住宅建設で削平するため調査を実施した。その調査結果によると、土壘の築造が新旧2時期あることが判明した。版築状に斜め方向に締った積み土（古段階）と斜め方向に礫を多量に含む荒い積み土（新段階）の2時期であった。平成11年度の6月（4次）から下水道工事に伴う発掘調査でも同様なデーターが得られており、これまでの4回の調査で南と西側の土壘築造状況については、新旧2時期の段階があることが判明した。今回の北側土壘調査では、新旧段階の土壘築造状況とは若干異なる様相がみられた。新段階の土壘版築に礫を混入させているところは、今回の土壘の状況と類似しているが斜め方向で荒い積み土とは異なっている所である。比較資料として前回の調査で提示しているもので、愛媛県松山市に所在する湯築城跡の土壘については、土壘は普遍的に用いられている積み方であり、今回の土壘築造方法も礫が多量に混入しているにもかかわらず、積み土は普遍的においられるもので、平成4年度の土壘築造状況と同様であった。新旧で考えると新段階の土壘築造に当たるであろう。土壘内側には自然礫の面を整えた石積みをしており、この施設については、犬走り的な施設が施されていたと考えられる。

その他の遺構については、前回の調査では層位的な位置づけから、地山面に直接掘込まれた遺構群を5世紀前半～中頃を0期とし、その整地層を挟んだ上面から掘り込まれた遺構群を古代～中世の1期として、1期の整地層上面を切る形で掘込まれた遺構群を16世紀後半の年代として2期として、全体で3時期の遺構群を考えており、今回の調査では0期の古墳時代は遺構、遺物を確認されておらず、3期と思われる。大友館内の土壘遺構と1期の9世紀～10世紀に比定される東西方向の溝状遺構と土坑を確認することが出来た。

古代については、館跡の東側に古代に関連づけられる竜王畠遺跡（旧あけぼの学園跡地）が所在し、遺跡からは豊後国府と関連づけられる遺構、遺物が確認されている。このことは、大友館の築造以前には古代の遺構が存在し、広がりを窺い知ることが出来る。

【参考文献】

池邊千太郎「上野大友館跡」『大分市埋蔵文化財調査年報4』1993 大分市教育委員会

坪根伸也・河野史郎「上野大友館（上原館）跡」『下水道工事に伴う発掘調査報告書』2000 大分市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	うえのおおともやかた（うえのはるやかた）あと							
書名	上野大友館（上原館）跡							
副書名	下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)							
編集者名	讃岐和夫・後藤典幸							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	〒870-0046 大分市荷揚町2番31号 TEL (097) 534-6111							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上野 大友館跡	大分県 大分市 上野丘西	322	049	33度 13分 30秒	131度 37分 00秒	20001127 20001212	60.70m ²	下水道 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
上野大友館跡	居館	中世 古代	土壘 構状遺構	青磁片 土師器坏蓋 須恵器カメ 綠釉陶器	今回の調査の結果、枠形を含む現況の土壘が戦国期である可能性が高いことがあらためて確認され、また、区画される古代の溝状遺構が北側土壘の直下に施こされており、国府関連の遺跡の存在も確認された。			

上野大友館（上原館）跡

下水道工事に伴う発掘調査報告書(2)

2002年3月

発行 大分市教育委員会
印刷 株式会社 陽明社